

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

June 2010 vol.11



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「本池秀夫 革の世界 LEATHER ART WORKS OF HIDEO MOTOIKE」

全体を支える豊かな細部

企画展 開館5周年記念展I「神々のすがた 古事記と近代美術」

視覚化された古事記を読む

活動弁士と生演奏によるスペシャルギャラリートーク「島根活弁ライブ 名画をいろどる話芸と音楽」報告

ギャラリートークの可能性

11



青木 繁《大穴牟知命》明治38(1905)年 石橋財団 石橋美術館

「本池秀夫 革の世界 LEATHER ART WORKS OF HIDEO MOTOIKE」

2010年7月16日(金)～8月30日(月)

休館日:火曜日(ただし8月10日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 《登校中》(部分) 1995年 個人蔵
 B. 《キリン》(部分) 2007年 作家蔵
 C. 《ピエロI》 2010年 作家蔵

全体を支える豊かな細部

米子を拠点に制作を続けるレザー・アート作家である本池秀夫(1951-)。20代の頃から革を素材に、約40年制作をつづけている。代表作は、子供と老人の何気ない一コマを再現する「革の人形」(図A)や、等身大の「革の動物」(図B)などの立体作品。

本池作品の最大の特徴は、その緻密な作り、細部へのこだわりにあると言っていい。

たとえば1995年制作の《登校中》(図A)。考え事をしている女の子や、本に熱中しながら歩く男の子、頭をかきながら大あくびをする男の子、彼らを暖かな眼差しで見守るおじさん、というように一人一人の個性がよく見え、人形同士の関係も想像される「革の人形」の秀作だ。本池は人形を、人の実際の1/7サイズで制作する。主に牛革を使用し、肌、衣服、鞆など、表現したい部位の素材に応じて表面の質感を調整し、形作る。人形がまとう衣服や小物は小さくするだけで、ジャケットには裏地を当て、靴はかかとを二重にするなど、我々がまとうそれと同じ構造をとる。ズボンの下には外からは全く見えないパンツや靴下などの下着を着つける。このように徹底して「人と同じ」にまとうせるのだ。したがって人形たちの衣服に生じる皺や色ムラは、我々が衣服をまとい生じるそのように、必然性を帯びる。本池によ

れば、こうした見えないところにまで及ぶ作り込みが、本池の目指す「本物らしさ」、人形でいうと「血の通っているような感覚」を生み出すのに不可欠であり、人形に託した感情の表現へ、鑑賞者の意識を向かわせるのだという。

そもそも本池が革で制作し始めたのは、こうした人形作品である。きっかけは22歳の時、旅先のイタリアで目にした、小さな陶器人形との出会いにある。名工として名高いジュゼッペ・カッペ作のその人形は、硬質な陶磁器であるにもかかわらず緻密に計算された皺や透かしの技法によって生き生きとし、まるで本当に血が通っているかのように見えたという。「しなやかな素材である革で作れば、さらにリアリティが出せるのではないか」、そう考えた本池は帰国後の進路を革の人形作りに決め、先人のない中何かも独学で始めた。1973年の5月である。

その後今日に至るまで、具象的なモチーフを作品とする場合には「リアリティの追求」という初志を徹底し制作を続けている。それは「革の人形」の小さな世界とは一見対照的な、等身大の「革の動物」にあっても同様と思われる。本物のキリンを動物園に見に行ったとして、我々はその頭頂部に生えた角の先が少しだけ隆起していること、あるいは

は下まぶたがくっきりとあることなど、ほとんど見とめられないだろう。ところが本池の高さ6mになる《キリン》(図B)は、そうした部分が細やかに惜しげなく再現される。作り物ゆえに我々は彼らのパーソナルスペースに踏み込んで動物たちを凝視することができるが、「本物ではないな」というよりも「そうになっていたのか」という思いが先じる。本池は「革の動物」においては、「本物よりも本物らしく」なることを目指しているという。鑑賞者である我々がそうした感覚を得られるとすれば、こうした見たことのない細部を、写真ではなく、剥製でもなく、見せられるかどうかにかかっているのかもしれない。

最新作の《ピエロ》(図C)は、ふくよかな衣服のシルエットを表現するため、これまで作品の一部に補助的に用いられるだけであった羊革を全面に使用している。衣装と化粧のデザインは、実在したピエロの古い資料を参考に仕上げた。色鮮やかな作品は本池の新たな一面を見せるが、細部へのこだわりは変わらない。ノスタルジックな雰囲気 completes 完すべく衣服は1920年代の古い糸で縫い上げたという。

作家こだわりの細部に目を凝らし、革表現の豊かな広がりをご堪能いただきたい。

(廣田理紗 当館学芸員)



図1



図2

図1. 小林未醒《山幸彦》 大正6(1917)年 石橋財団 石橋美術館

図2. 安田鞞彦《古事記》 昭和21(1946)年 愛媛県美術館

視覚化された古事記を読む

『古事記』とは、現存する日本最古の歴史書で、上・中・下の3巻にわたる。序文によれば、^{ひえだのあれ}稗田阿礼が天武天皇の勅で誦習した帝紀および先代の旧辞を、^{おおのやすまろ}太安万侶が元明天皇の勅により選録して和銅5(712)年献上されたもので、^{かひびやく}天地開闢から推古天皇までの記事を収め、神話・伝説と多数の歌謡を含みながら、天皇を中心とする日本統一の由来が記されている。一方で文学としての魅力にもあふれ、まもなく編纂から1300年の節目を迎えるこの古典への憧憬は深く、現代語訳や、関係書籍の発行は後を絶たない。

近代美術史上、鮮烈に『古事記』の世界を描いた画家の筆頭に挙げられるのが青木繁であるが、青木は、本居宣長の『古事記伝』の影響を強く受けているようだ。そのことをうかがわせるのが『大穴牟知命』(表紙)だ。ここでは焼けた大きな岩を猪と思い、捕まえようとして死んでしまった大穴牟知命が横たわり、蘇生させるため母神から使わされた女神二人とともに描かれている。この場面を本居宣長は、やけどに母神の母乳を塗って再生させたと解釈しており、青木繁の作品もまさしくそうした解釈のもと描かれた図だ。

ところが、最新の古事記研究では、大穴

牟知命は、完全に岩に焼き付いてしまい、形がなく、その焦げた炭のような体を女神たちが岩からこそげ落として集め、母神の母乳と練り混ぜて再生させたとの解釈が一般的である。とても絵画にはしにくい場面だが、幸い青木はそれを知らぬまま、『大穴牟知命』は名作として誕生した。

このように、『古事記』のどの場面をどのように描くか、というのは同じ話であっても時代や解釈によって変化する可能性をもつはずだ。また、長い『古事記』のどの場面を描くかも、作家は原則自由に選べるはずだが、残された作品を見ると、その画題はかなり偏っている。天孫降臨以前の話は極端に少なく、またそれ以降の話も場面の重複が見られる。例えば山幸彦の物語では、山幸彦と豊玉姫の出会いが選ばれることが多い。小杉未醒の『山幸彦』(図1)もまさにそうした場面でお互いの姿を中央の泉にうつる水鏡で認め合い、恋に落ちる瞬間を描いている。数ある同じ画題の作品の中でも秀逸な作品の一つだ。

『古事記』、『日本書紀』の記紀神話は、明治の近代国家の形成に、あるいは太平洋戦争の戦意昂揚にと、ナショナリズムが高まる時代に盛んに描かれた過去を持つ。画題の偏りは、『古事記』の成立上、天皇

家の正当性にポイントがおかれ、それが象徴的に示される場面を多く選択し、その啓蒙として、物語のハイライトシーンを、形を変えて繰り返し描くことが求められ、選択されたことから起きている。当然作品は、マンネリ化していくことになるが、優れた作家の作品は、その危険を巧みに回避している。しかし戦後は、記紀神話に触れることが極端に忌避され、イマジネーションの源としても顧みられなくなる。

昭和21(1946)年に描かれた安田鞞彦の『古事記』(図2)は、神話が極端な批判にさらされている中で描かれた作品である。左が諸部の稗田阿礼、右がその言葉を書き留める太安万侶で、よけいなものを一切描かず、清潔で真摯な印象を受ける作品だ。歴史画をよくした鞞彦の、批判に惑わされない、冷静な視点がそこにある。

この展覧会では、『古事記』を絵画化するということの意味を、残された絵画・彫刻などの作品で見たい。そうすることで、1300年読み継がれた物語を、今一度ニュートラルに、美術で楽しむ機会となれば幸いと思うからである。

活動弁士と生演奏によるスペシャルギャラリートーク 「島根活弁ライブ 名画をいろどる話芸と音楽」報告 2010年3月21日(日)

ギャラリートークの可能性

美術館の展示室における作品解説「ギャラリートーク」は、今やほとんどの館で実施されているといっただろう。当館でも学芸員の解説のほか、ボランティアによるコレクション展でのギャラリートークを実施している。当館のボランティアによるトークは、作品や作者の情報を伝えるよりも「お客様が絵を楽しむための話し相手になる」ことを目的としている。美術について気軽に話し合う場にしたいと考えているからだ。

以前から美術を「面白がる」ために、もっとギャラリートークを活用できないかと考えていたところ、今年3月にチャンスが到来した。グラントワの「いわみ芸術劇場」で「キネマと音楽の夕べ」と題し、活弁(映画の説明)と生演奏による無声映画の上映を行うことになったのだ。そこでふと思いついて「グラントワには美術館もあるので、美術作品を説明したり、音楽をつけたりしてみませんか?」と水を向けたところ、活動弁士と音楽家が非常に乗り気になってくれた。こうしてコレクション展「人物の表現」において、活動弁士の説明とオリジナル曲の生演奏によるギャラリートークが実現したのである。

まず学芸員が展示プランを作り、出品作品のうち大勢で鑑賞しやすい大型のものをピックアップした。そこから3人の音楽家が好きな絵を選んで作品の印象を元に曲を作り、活動弁士が台本を書く、という手順

で準備を行った。

さて、本番を前に実際の作品の前に立った出演者たちは、図版で見ていたときとの印象の違いに驚きの声をあげた。本物の迫力や表情の豊かさを目の当たりにした彼らは、リハーサルで修正を加えながら曲を磨きあげていった。学芸員にとっては、音楽家や弁士の鋭い観察眼や豊かな発想に感心すると同時に、収蔵品の持つ魅力を改めて実感する機会となった。

進行は各々の作品について、まず弁士が独特の語り口で説明をし、曲が演奏された後、弁士が作曲者に制作裏話をインタビューするという形式となった。「竹林七賢、商山四皓図」にちなみ中国をイメージした曲、19世紀末パリのポスターに寄せた華やかなワルツ、繊細な美人画のための美しいピアノソロ、そして絵師・英一蝶の島流しを主題とした屏風のための深遠な曲が、次々と披露された。途中には、作品のすぐ脇で演奏するサクソフォンの即興曲と、それに応えた弁士による即興の「絵の人物たちになりきった会話」も挿入され、観客から笑いと大きな拍手が起こった。

今回は演奏会ではなく「ギャラリートーク」なので客席は設けず、3人の音楽家が展示室の中央で向かいあって演奏し、活動弁士と観客は壁際の作品と音楽家の間を自由に動き回るという配置をとった。そ

の結果、進行するにつれ観客と出演者が入り交じり、終演の頃には和やかな一体感が生まれていた。

とはいえ単なる「出演者と観客の距離が近い演奏会」ではなく、その場にいた全員が絵を媒介に交流したところに、展示室でこの催しを行った意味があった。話芸のプロである弁士の発声や語り口は、学芸員の何倍も人々をひきつける。そして音楽による解釈を聴きながら絵を見ると、頭で作品を理解しようとする時とは違った心持ちで、絵の世界に入ってゆることができる。今回とりあげた5つの作品が、時代も国籍も技法もバラバラだった点もよかった。中国の竹林で居士たちと遊んだ後、ワルツによってフランスのお転婆娘のモダンファッションを楽しみ、かと思えば悲しい別れに涙する江戸の人々の気持ちにより添う……という、まるで5本立ての映画会のような構成となった。また、美術史の文脈から離れて純粋に描かれたものを味わい、絵について語り合う機会にもなったと思う。来場者が終演後も展示室にとどまり、改めて作品を見なおしていた姿が印象に残っている。

目下、今年12月4日開催の第2弾を準備中である。美術館の課題である「収蔵品の活用」をめぐる議論に一石を投じる企画に成長させたいと思っている。

(川西由里 当館主任学芸員)



出演: 坂本頼光(活動弁士)、鈴木広志(サクソフォン)、大口俊輔(ピアノ)、小林武文(パーカッション)